

主 論 文 要 旨

報 告 番 号	① 乙 第	号	氏 名	東 條 杏 奈
主 論 文 題 名				
Video capsule endoscopy in overt and occult obscure gastrointestinal bleeding: Insights from a single-center, observational study in Japan (顕性および潜在性の原因不明の消化管出血におけるカプセル内視鏡検査：日本の単施設における観察研究からの知見)				
(内 容 の 要 旨)				
原因不明の消化管出血 (Obscure gastrointestinal bleeding : OGIB) は、上部および下部消化管検査で出血源が特定できない消化管出血を指し、しばしば小腸を出血源とする。OGIBは、出血が臨床的に明らかに観察される顕性出血 (overt OGIB) と、便潜血陽性または鉄欠乏性貧血 (iron-deficiency anemia : IDA) として発見される潜在性出血 (occult OGIB) に分類される。カプセル内視鏡検査 (video capsule endoscopy : VCE) およびバルーン内視鏡 (balloon-assisted enteroscopy : BAE) はOGIBの原因精査に広く用いられているが、両者の最適な位置づけはいまだ明確でない。特に、overtおよびoccult OGIB患者におけるVCE所見やBAE介入成績の違いなどの系統的な比較や、さらにVCE陽性所見に関連する因子については十分に検討されていない。本研究では、VCE所見に基づき、overt及びoccult OGIB患者におけるBAE施行および介入の実態を明らかにすることを目的とした。 2004年から2022年に慶應義塾大学病院でVCEを施行したOGIB患者430例 (overt 253例、occult 177例) を対象とし、患者情報やVCE所見 (VCE所見はSaurin分類に基づきP0 (非出血性)、P1 (出血源か否か不明)、P2 (出血性) に分類した)、VCE施行後のBAE施行の有無、BAE施行患者においては検査陽性所見の有無、治療介入の有無およびVCE施行後の臨床経過などのデータを集積した。これらのデータを用いて、主要評価項目をVCE施行後のBAE陽性所見率および治療介入率、副次評価項目をovert OGIB患者における再出血率と両型のOGIB患者におけるVCE陽性所見 (P2) に関連する予測因子とし、後方視的に解析した。 VCE所見では、P0/P1/P2分類における患者割合はovert OGIB患者で29.6%/44.7%/25.7%、occult OGIB患者で27.1%/44.1%/28.8%であった。P0群ではBAE施行率はovert、occult OGIB患者でともに0であった。P1およびP2群でのBAE施行率は、overt OGIB患者ではP1群35.3%、P2群83.0%、occult OGIB患者ではP1群24.4%、P2群84.4%であり、overtとoccult OGIB患者ともにP1群と比較しP2群で有意に高率であった。BAE検査における陽性所見率は、overt OGIB患者ではP1群75%、P2群84%と差を認めなかったが、occult OGIB患者ではP2群94.7%がP1群72.7%を上回り、BAEによる治療介入率も、overt OGIB患者ではP1群29.1%、P2群43.1%と差を認めなかったが、occult OGIB患者ではP2群50.0%がP1群9.09%より高い傾向にあり、治療対象の疾患は、P2は特に腫瘍やポリープなどの器質的疾患が多く認められた。VCE後60日における再出血率の検討では、P0/P1/P2分類において対象となったovert OGIB患者数は60/82/46例で、このうち再出血を認めた患者数は5/11/10であった。また、両型のOGIB患者で、VCEでP2所見を呈するか否かをアウトカムとした多変量解析では、overt OGIB患者で低ヘモグロビン値および低用量アスピリン使用、occult OGIB患者で血液透析がP2所見の独立した予測因子であった。 これらの結果から、VCEは特にoccult OGIBにおいて、治療介入を要する病変を効果的に同定し、不要なBAE施行を減らす可能性が示された。再出血率はVCE所見により異なっており、ハイリスク症例における経過観察の重要性が強調された。本研究により、VCE所見がovert及びoccult OGIBにおけるBAE施行および治療介入判断に有用な情報を与えることが示された。				